

学校だより



市川市立平田小学校

いなほ  
稲穂

学校教育目標  
夢をもち、たくましく生きる  
子どもの育成

No.15

R6年11月13日

～共に学ぶ 共に育つ 共に感動する 共に未来を創る～

校長 蜂須賀 久幸



## 相手を理解する気持ちと行動が安心を生み出す

小学校の保健室に着任した先生は、ぶっきらぼうだけれど、鋭い観察眼で病気のサインを見抜いていきます。松下洸平さん主演のドラマ『放課後カルテ』です。その第1話は、嘘をついていると信じてもらえない〈拓真〉と授業中でも居眠りをしてしまう〈ゆき〉を中心に進展します。

〈ゆき〉は、保健室のベッドで寝る時間が心の平穏を保っていました。休日に友達と約束の時間にも起きられずに、翌日気まずい思いをします。決して夜更かしをしているわけでも、サボっているわけでもないのに、周りからは仮病とか嘘ばかりだとか思われて誰からも信じてもらえません。終いには、「私なんかどこにもいない方がよい」と思いを吐露するのです。この〈ゆき〉の症状を松下洸平は、ナルコレプシーであることを見抜き、〈ゆき〉を追い詰めたクラスメイトに「どれだけひどいことをしたか自覚しろ！」と叱責したのです。

ナルコレプシーは、過眠症の一つ。病気であるにもかかわらず、大事な場面等で眠ってしまうことがあって、「集中力不足」「やる気がない」「だらしない」「不真面目」などと思われることが多くあります。周囲が認識しない、あるいは本人すらわからないこともあって、“SOSを言葉にできない”ことが往々にしてあります。



これはナルコレプシーに限ったことではありません。教室から飛び出してしまうったり、朝起きられなくて遅刻が多かったりする人が周りにいないでしょうか。黙っているべき場面で声をあげてしまったり、じっとしていられなかったりする人はどうでしょう。「サボっている」「〇〇さんばかり特別扱いでズルい」なんて思うことはないでしょうか。気にしないというのは無理です。でも、気になるということは、その人を認めている証拠かもしれません。特別なことをする必要はありません。気持ちを察したり、丸ごと認めたりすることが、その人の安心な学校生活・社会生活の第一歩です。でも、間違えた行動や許せない行為には、わかりやすい言葉で注意をしたり「私はこうしてほしい」という思いを直接伝えたりすることも大事です。親や先生、大人の言葉よりも心に届く場合も少なくありませんから。

学習においても、「何がわからないのかがわからない」といったケースを見受けます。ダメ出しのレッテルを貼ることは簡単ですが、相手を理解しようとし、寄り添うことで相互に通じ合う思いもあるはず。電車の優先席でスマホに釘付けの若者、駐車場の空いている思いやりスペースに堂々と駐車する健常者。見知らぬ第三者に配慮し、近づこうとする気持ちがあれば、みんなが気持ちよく安心して過ごせる学校や社会になると信じています。あなたの第一歩はどんなことですか?!

■市川市小学校陸上競技大会

100m走 第三位 5年 Y・N  
走り幅跳び 第六位 6年 T・D

■市川市児童生徒科学工夫作品展

優良 5年 池沢 穂波

■市川市読書感想文コンクール

優秀賞 5年 K・N  
優良賞 1年 M・K  
" 2年 M・I  
" 3年 S・D  
" 4年 M・R  
" 6年 M・K

■市川市議会開設90周年記念作文コンクール

議長賞 5年 T・M  
副議長賞 5年 K・N

■「みつけよう！わたしの町のたからもの」

ユネスコ絵画コンクール

教育長賞 5年 K・A  
優秀賞 4年 F・Y

■「住みよい地球」全国作文コンクール

努力賞 4年 N・M

■京葉ガス絵画コンクール

準佳作 3年 T・K  
" 5年 U・M  
" 6年 I・N

■市川市火災予防絵画展

佳作 4年 T・H

先日、議場で行われた表彰式で、「私たちの思いを、未来へつなごう！」をテーマにした、下の作品『伝統工芸で笑顔の花咲く市川市へ』を堂々と読み上げました。波線部(原文にはなし)にあるように、考えただけで終わらせず、行動すること、継続することを誰もが実践にしてほしいと願います。



急いで家に帰り、アルバムで七五三のときの写真を確認した。イチョウが色づく葛飾八幡宮、おっちりとした頬で恥ずかしそうに笑う3歳の私の頭には、赤色の可愛い「つまみかんざし」が付いていた。

千葉県の伝統工芸品、江戸つまみかんざしを知ったのは、一学期の授業だった。市川市の有名なものを各グループで調べ、発表する授業で、友達のグループが写真付きで「つまみ細工」を発表していて、色とりどりで可愛いな、と思った。そしてある日、なんとなく「広報いちかわ」を眺めていたら、夏休みにつまみ細工体験会が開催されていることを知り、参加することにした。

当日教えてくれたのは、伝統工芸士である穂積裕子さん。丸くふっくらとした「丸つまみ」の花びらを5～6枚を貼り合わせた花を飾ったフォトフレームを作った。ピンセットで一枚一枚ていねいに貼って花の形にしていく作業は、初めは花びら一枚一枚のバランスを保ちながら貼るのが細かくて大変だった。でも気づいたら無言で、夢中になっていた。

裕子さんの父である穂積実さんは現在88歳。1951年に集団就職で上京し、親せきの紹介でつまみかんざしの修業を始めた。当時はまだ女性たちが着物を着用している時代だったため、つまみかんざしは日常品として使われていた。裕子さんは、父である実さんの姿を子どものころから見ていて、はじめは「伝統工芸品やその技術を守っていかなくてはならない」という思いだったそう。でも今は「七五三や成人式などの晴れの日に、彩りを添えたい」という気持ちで、春は大人、夏は子ども向けに体験教室を開催し、多くの人に知って興味を持ってもらえたらと語っていた。そしてその横には、体験会に参加している小さな子どもたちの作業を優しく手伝ってくれるお姉さんの姿が。裕子さんの娘のあゆさん。「この子が継いでくれるかわからないですが、今はお手伝いだけ、ね」と裕子さん。

伝統を守ることは、誰かの笑顔を守ることに繋がっていた。私たちができることは、まずそれを知り、自分で体験したり、自分の言葉で感じたことを伝える、そして使っていくことなのだと思う。10年後、私は20歳になる。成人式の形は変わっているかもしれない。服装も、和装だけでなく、もっと自由で个性的になっていくかもしれないと思う。でも私は着物を着て、つまみかんざしを頭に飾り、きっと七五三のときと変わらぬ笑顔で笑っているだろう。伝統工芸だから守らなければならない、それはもちろん大事だけれど、良いものを当たり前のように誰もが知り、使っていくことで生活の一部として残っていくことの方が大事だと思う。10年後も古き良きものを身に付け、笑顔があふれる市川市であつたらいいと思う。



読書週間(11/11~11/29)が始まりました!

